校長室だより

松江東高等学校

第40号

令和６年８月22日

○ 働くという事

新聞奨学生→

７月に開催された中四国地区PTA大会で、久しぶりに大学時代を過ごした高知を訪れました。大会は高知県立県民文化ホールのオレンジホールでありました。このホールは大学時代に何度もコンサートのアルバイトで来た所でした。当時人気だった小室哲哉率いる TM NETWORK やレベッカの時などは、最前列の客と対峙するためアーティストには背を向けてステージ下にしゃがみ、前のめりになる観客を阻止する仕事もありました。楽器搬入・搬出やチケットのもぎり、会場警備など仕事はたくさんありました。楽屋に呼ばれお使いを頼まれることもまれにありました。喫茶店でカレーを受け取り小室さんに届けたのは今でも思い出です。

大学時代、コンサートのバイトの他には、下水道に溜まったヘドロの撤去、珊瑚のせりの手伝いなどたくさんの日雇いの単発アルバイトをしました。一番辛かったのが、学校の校門前でのチラシ配りやアーケード街でのティッシュ配りでした。無視され受け取ってもらえないことはあたりまえで、不審者扱いの視線を送られることもありました。そんな時に「おはようございます」と挨拶をして受け取ってくれる小学生などは天使に見えたのを覚えています。

働くことの目的は「生計の維持」だけでなく「自己実現」もあります。仕事にやりがいや生きがいを感じれば、自身が成長することで充実感も得ることができます。また「貢献（意欲）」もあります。人の役に立ちたい、社会の役に立ちたいというのを大学等の入学願書の志望理由に書く人も多いと思います。

大学時代、一番アルバイトの機会が多かったのが家庭教師でした。体育会系のソフトテニス部（当時は軟式庭球部）に入っていたので、土日は遠征や大会もあり、部活動が終わったあとの平日の時間帯にできる家庭教師は、時給も高く、遠征費を稼ぐ意味でも好都合でした。夕ご飯をごちそうになることが多かったのも魅力でした。しかし、今思えば、このアルバイトを通じて教員を目指す意識が固まったと思います。教えることのむずかしさと楽しさを知り、自分なりに教え方の工夫をしたりしました。なにより成績が伸びて、志望校に合格してくれた時は、喜びと安堵が入り混じった不思議な気持ちになりました。大学は文学科部系で、教育学部ではありませんでしたが、教員にやりがいと魅力を感じるようになりました。

日雇いの単発アルバイトの目的は、主に「生計の維持」、いや仕送りがあったのでその補助でした。しかし、家庭教師は、そこに「自己実現」と、なにかしらの「貢献意欲」があったと思います。

新聞奨学生というのがあります。簡単に言えば、朝夕の新聞配達をすることで給料をもらいつつ、新聞社が出す奨学金の返済も免除されるものです。この新聞配達の仕事も、目的の一つが「生計の維持」ですが、大学で勉強して卒業するという「自己実現」が目的でもあることが、学校と仕事の両立を支えていると思います。学校は「自己実現」をめざす場です。最近は、地域との連携の中で「貢献（意欲）」も教育活動に多く入るようになりました。これに「生計の維持」が加わる仕事の意義を考えて欲しいと思います。